

病理診断科後期研修プログラム

I. 研修内容と到達目標

日本病理学会専門医研修プログラムにしたがって研修する。

(社) 日本病理学会ホームページ <http://pathology.or.jp>

当院では電子顕微鏡、蛍光免疫染色も院内で行っており、一般病院であるが、研修プログラムのすべての項目を院内で経験することができる。

また細胞診専門医は、一定のカリキュラムをこなすことにより、臨床科に所属していても取得可能である。細胞診断に携わると同時に、細胞検査士の指導にもあたる。

【必要な知識】

1) 病理業務に関わる知識

1. 病理業務に関連する法および制度を説明できる。
2. 病理業務に関するリスクマネジメント（医療廃棄物問題を含む）を説明できる。
3. 病理業務の資料を管理し、保存できる。
4. 病理業務で得られた人体材料を研究に用いる際の手続きを説明できる。

2) 病理診断に必要な知識

1. 基本的な病理組織標本の作製過程を説明できる。
2. 免疫組織化学（免染）を含む特殊染色の原理を説明し、結果を評価できる。
3. 電子顕微鏡（電顕）標本の作製過程を説明し、結果を評価できる。
4. 分子病理学的検索の原理を説明し、結果を評価できる。
5. 病理診断に必要な臨床的事項を的確に判断し、病理診断との関連性を説明できる。
6. 病理診断に対してコンサルテーションの必要性を判断できる。

3) 病理診断に必要な技能

1. 病理診断の進め方を理解し、自ら診断できる。（組織診年間 3,000 例程度を目標）
 - a. 主要臓器の手術材料を肉眼観察。取り扱い規約に基づく切り出しを行い、検鏡・組織診断を自ら行う。
代表的な腫瘍の組織型に加え、特殊型を理解し、自ら診断できる。

- 非腫瘍性病変を理解し、自ら診断できる。
- b. 全身臓器の生検材料の診断を行う。
 - c. 特殊染色を適切に選択し、その結果を理解し、診断に応用する。
 - d. 全身臓器の細胞診材料の診断がおよそできる。
 - e. 術中迅速材料の診断ができる。
 - f. 組織カンファレンスで病理所見の提示を正確に行える。
2. 病理解剖の解析を自ら主体的に行える。
 - a. 年 15-17 体を目標に病理解剖を行い、自ら解析し、肉眼診断書および顕微鏡的診断書を書く。
 - b. CPC で病理側の症例解説を適切に行える。
 - c. 後期 2 年次に死体解剖資格を申請、取得する。
 3. 病理業務におけるバイオハザード対策を実行できる。
 4. CPC や臨床とのカンファレンスにおいて、病理所見を的確に説明できる。

4) 求められる態度

1. 病理診断、剖検および CPC などの際に患者や遺族に対する配慮ができる。
2. 病理業務において、臨床医と適切に対応できる。
3. 学生、臨床研修医および病理専門医初期研修医に対する病理の指導ができる。
4. 病理業務に関してコメディカルと協調できる。
5. 病理診断の精度管理について積極的に関与する。
6. 学会、研修会、セミナーに積極的に参加する。
7. 病理業務の社会的貢献に積極的に関与する。
8. 人体病理学に関する研究を行い、結果を報告できる。

Ⅱ. 週間スケジュール

午前：診断書作成指導

午後：外科材料切り出し・仮診断書作成

【他科とのカンファレンス】

月曜日：腎臓内科、産婦人科

火曜日：肝臓グループ

水曜日：院内合同 CPC、放射線科合同カンファレンス（月 1 回）

木曜日：皮膚科

金曜日：乳腺グループ（月 1 回）

日本病理学会総会、近畿支部会、臨床細胞学会等に参加し演題を発表し、年間 2 題以上の論文作成(症例報告を含む)を推奨している。